HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	渡辺英二著『春庭の語学研究 近世日本文法研究史』
Author(s)	野村, 眞木夫
Citation	国語国文研究, 102, 56-62
Issue Date	1996-03-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94845
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_102_56-62.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

書評

渡辺英二著『春庭の語学研究　近世日本文法研究史』

野村眞木夫

はじめに

文献学（philology）を、書誌に関する操作・本文批評・注釈に関する研究の三領域から構成される学問であると規定するならば、渡辺英二（以下、著者と呼ぶ）著『春庭の語学研究』は、本居春庭による語学関係のテキストの、文献学を基調とする研究を徹底させた成果として評価される。およそ、研究史（学説史）というとき、そのような作業を軽視して、あるいは既に終了したものとして、テキストの表層をのみ解読することが行われもするし、ともすれば、その方が研究史の記述として視野のひろい成果を見せもする。この意味からすれば、著者の仕事は、研究史全域への目配りはひろいが、しかし具体的な対象を限定した地味なそれであり、導き出す結論や見解の述べ方は、手堅くむしろ控え目である。

さて、本誌『国語国文研究』第五〇号および第百号に掲載の分類総目次によって、著者の国語学関係論文を求めると、一四篇を数える。これをあらく分類しなおせば、ほぼ掲載順に次の三類になる。

① 敬語を中心とする平安朝文法の研究
② 柴田常昭『詞つかひ（詞の小車）』の研究
③ 本居春庭『詞通路』の研究

著者の仕事は、本誌以外に発表のものも多く、とくに②については『富山大学教育学部紀要』に掲載された「翻刻と注記」が重要である。また、鈴木朖学会や鈴屋学会の学会誌に発表された春庭関係の論文がある。

このたび刊行されたのは、書名からも明らかなように、③にかかわる論考が頁数のなかば以上をしめ、さらに春庭『詞の八衢』を扱い、これとのかかわりでしばしば②にも言及する。仕事の全体像としては、②の知見を媒介させながら春庭の仕事をとらえなおす姿勢が濃厚であり、これが本書の特徴である。

そのように、本書は、②③とその関係する領域の研究を総合的に

組み上げて、なっているのであるが、論文集という体裁ではなく、書き下ろしの項が相当量をしめ、既発表の論文も一書をなすべく全面的に書きあらためられている。また、春庭関係の未紹介の資料の翻字と注記が添えられていて(第二部第五章)、この部分だけをとりだしても学界を益するところ大である。

一　本書の内容と位置づけ

本書の内容を一覧しておこう。

第一部　『詞八衢』
第一章　語学研究の動機
第二章　『詞八衢』の内容
第三章　初稿本『詞八衢』の例語
第四章　証例と例語
第五章　刊本『詞八衢』の成立
付　節　『詞つかひ』
第二部　『詞通路』
第一章　自(動詞)・他(動詞)の研究
第二章　六段図と上下対置語
第三章　自他詞の成立
第四章　文構造の研究
第五章　『詞八衢』と『詞通路』の草稿
第六章　春庭の語学

第一部では、活用研究の資料調査をふまえて、『詞八衢』の初稿本から刊本の成立までを探求している。まず、本居宣長『活用言の冊子』や柴田常昭『詞つかひ』を参照しながら、春庭の『詞八衢』の初稿本と刊本の活用型排列を分析する。また、初稿本『詞八衢』の例語排列と刊本の活用型認定を検討し、宣長と春庭の仕事のあいだに『詞つかひ』を介在させる可能性を論証する。その過程で、証例カード「やちまた不用」及び「やちまた例語草稿」・「同第二」に言及し、春庭には、より確実な用例をもって事を述べる、実証的な態度が顕著であり、帰納的な考え方が明確になっていった、とする(一一四―五)。そうして、山田孝雄・時枝誠記・古田東朔・足立巻一・尾崎知光の説を吟味した上で、つぎのような結論をみちびく。

てにをは紐鏡→活用言の冊子→詞つかひ→初稿本詞八衢
詞玉緒
古事記伝
その他の宣長著書

以下、刊本の成立する過程で、徹底的に五十音図を適用する態度が生じ、これが活用体系の整理に有用であったと同時に、その後の研究を制約するものともなったことを指摘する。

第一部は、常昭『詞つかひ』を位置づけることにおいて、実証的な態度でのぞみ、その学説がよく参照される。同書は、後藤一日・尾崎知光そして著者によって、既に一定の研究が公表されているのであるが、しかし、周知の学説とはいいがたい。それゆえ、第一部の通読は、付節で与えられる情報を蓄積したうえで行うのが、一般の読者には適当であろう。

第二部では、自他研究の資料調査をもとに、自他の範疇の確立か

ら文構造の研究までを追って、『詞通路』刊本の成立過程をあつかう。

はじめに、自他の概念の諸説を確認し、『詞通路』の説を探求する。ここで設けられた視点は、六段図と上下対置語・意義規定の三者である。六段図の構成について、刊本以下五種のそれを比較し、「おのつから然る」は最も自的な語の意義規定であり、「みつから然する」↓「物を然する」のように順次他的な語になるととらえる（二九一）。上下（自他）対置語は、その意義規定の組み合わせ一六種を検討し、「春庭の考える自・他は一つの語（形）に一つの意義が固定して与えられるというものでは、おそらくない。どういう語（形）と自他の対応をなすかという相対的関係によって、決まるものである」（三一五）とする。そうして六段図の構造と体系を考察する過程で、「格」を分析の観点として導入する。また、意義規定といっても、ただ刊本のそれを解釈するのではなく、諸資料の間での変更を問題としている点、著者は冒頭に述べた態度を一貫させている。その、意義規定については、たとえば「自」をどう読むかといった検討などを経て慎重である。

第二部第三章以下では、自他にかかわる資料類の性質を明らかにしつつ、次のような成立過程をとりだす。

刊本詞八衢↓自他詞資料一↓自他詞資料二↓詞のカード↓自他（同意草稿）↓初稿本詞通路↓成稿本詞通路↓刊本詞通路

途中、第四章では、春庭の文構造の研究について、富樫広蔭「詞通路雛誤抄出」を参照しながら、その図示の異同を、直接修飾・間接修飾・意味連結（意味としての成分を優先させる係と受けの関係）・同音連結（形式としての成分よりも同音を優先して係と受けの関係とする図示）などの範疇について検討する。第六章が本書の要約的な総括で、宣長・常昭・春庭の研究の関係が整理される。「活用・自他・格」が全体のキーワードである。

ところで、春庭の文法学説の資料的な研究のまとまったものとして、小説ではあるが、足立巻一の『やちまた』（一九七四・河出書房新社）がある。これに『詞八衢』初稿本をはじめとする資料発見の経緯が記載されている。本書「おわりに」では足立との私的な関わりにも言及している。『詞八衢』初稿本は、尾崎知光『国語学史の基礎的研究』（一九八三・笠間書院）に影印・翻字がある。足立・尾崎の仕事は、柴田常昭『詞つかひ（詞の小車）』を『詞八衢』の成立過程に介在させることにあり、著者の研究はこのながれに添っている。なお、尾崎による『詞八衢』初稿本の翻字の誤りは、引用に際して訂正されている。

『詞通路』については、その自他の認識をとりだした島田昌彦『国語における自動詞と他動詞』（一九七九・明治書院）がある。島田の研究は、標記の問題を、春庭の学説を中心にして総合的にとりあげたものである。しかし、春庭の著作についていえば、テキストを『本居宣長全集』（吉川弘文館）によっており、冒頭にのべたような文献学的な操作を、少なくとも表面的には経ていない。

著者の仕事は、最初にのべたような態度によっており、右の島田の仕事は、研究者たちが自他をどのように把握し整理したかを解読し、これを理論展開の時間軸に位置づけようとしたもので、両者の記述の態度は、あきらかに異なる。相補する関係にあるととらえるべきものである。

二　研究史記述の意義

研究史は、はたしてどのような意義のあるものか。過去の研究(者)の欠陥をとりだしたり、逆にその天才を称揚する記述はなりをひそめたとしても、この問いは必ずしも意識されずにいる。研究史の記述が一定の思想においてなされるばあい、これはむしろ明快である(たとえば、ヘルビヒ『近代言語学史』一九七〇・白水社)。本書は、研究史のための基礎的な作業を中核とする。とはいえ、著者の研究に対する歴史観が、そこにはあきらかに反映されている。

初稿本『詞八衢』の段階で春庭に車の観念があったといっても、直接『詞つかひ』に依ったものかどうか、勿論、それは不明である。全く関係が無かったとしても活用研究の歴史の必然として『詞つかひ』の「車」の論の延長線上に「初稿本」の例語排列を位置づけることは可能であるし、柴田常昭に与えた宣長の影響を考えればそれは当然のことである。(七五)

『詞つかひ』が多くの証例を有し『詞八衢』もまた多くの証例を有する。この共通点は、直接の影響関係は別としても重要な意味をもつ。『詞つかひ』はこのような形で『詞八衢』の成立に関与した。少なくとも活用研究の自然な史的発展の中で、『詞つかひ』は確かな一点を占めている。(八八)

この記述は、一に要約した著者の結論を、根拠の薄弱なものとなしかねない。しかし、ここでは、研究過程をどのようにとらえるのかが問われる。すなわち、文献上の、あるいは直接の、たとえば子弟関係としての連携の有無にかかわらず、ある時期の複数の研究成果が類比的な認識活動の所産であることがしばしば見られる、このことを明確に受けとめるかどうか、ということである。常昭が、宣長の門人なのであってみれば、その関係がさらに補強されるわけである。研究史は、直接の影響をあとづけるだけではなく、ある時期の研究者たちが、研究対象をどのようにえらび、どのように問題をあたえたか、その課題意識の側面をとりだすのも仕事の一つである。著者はこれを全体像として把捉しているわけである。ただ、その意味においても「活用研究の歴史の必然」といった表現は、説明として配慮に欠けよう。

三　自他研究の書として

一に述べたように、本書は、春庭の語学研究について、「活用・自他・格」をキーワードとして、諸資料に即した検討を加えた国語学史の書である。この領域について、山口明穂は「一般に、学史は過去の研究を現在未来の学問に生かすのが本来の目標といってもよい」と述べている(「国語学史」国語学会編『国語学の五十年』一九九五・武蔵野書院)。それでは、本書をそのような観点からとらえたとき、どのように評価されるであろうか。

本書の自他のとらえかたは、格の範疇を導入したことで、分析の組織を綿密にしえた。次のような記述がそれである。

「物の」は主格ガを明示するものと考えられるから「おのつから然る」はガ格を、あるいはガ格だけを要求する動詞に与えら

れる意義規定であり、「物の」に対する「物を」はヲ格を表すものであるから「物を然する」はヲ格を必須の条件として要求する動詞に与えられる意義規定ということになる。「おのつから」は自である「然る」と結び付くことが必然であり、「物を」は他である「然する」と結び付くのが必然である。とすると、「物の」とも「物を」とも関わらない「みつから」は、主体「自」に関するものであってもガ格のみを要求する動詞とも言えず、といってヲ格を要求するとも言えない動詞、言い換えると、ガ格を要求するとともにヲ格を要求することもあるという動詞に与えられた意義規定ということになろうか。(三一〇)

「おのつから然る」と「みつから然する」とは、いわば前者が全的な自、後者は他的な自という違いがある。(三一一)

このように、自他を動詞と格助詞との組み合わせでとらえることは、著者も言及しているように(二三八以下)、すでに松下大三郎などによって積極的にいれられていた。また、評者の手元にある「静篁舎」の蔵書印を有する『詞通路』[上十一ウ欄外]にも、「通路ハ上ニをノ字ノ有ル者ハ多ク物を然するト定メタルヨウ也」と朱筆がある。これが、三浦弘夫(一八三三〜一九一三)によるものか、確証をえないが、このような認識は夙に行われていたものと察せられる。

そのような中で著者の記述に説得力をあたえるのは、「おのつから」「みつから」という語句そのものの意味にひかれることなく、「初稿本」「成稿本」「刊本」の記述を比較検討しながら導き出されたところにある。それでは、本書で採用されている「格」とはどのような概念か。ここでは、理論的な範疇化に精密さを欠いている。たとえば、「ガ格・ニ格」といった言及のしかた(三一〇)からすれば、さしあたり、いわゆる表層格であるが、「主体(ガ格)」などの記述がみえ(三四四)、さらに「ガ格の意志」(三二八)という表現、さらに「御名の立ち給ふべきを」を「ガ格」とする用法(三一三)からすると、表層格と深層格とが区分されていないようである。研究史の記述が特定の理論に依存している必然性はないとしても、一定の共通理解への対応が求められよう。

さらに一例をあげるならば「みつから然する—物を然する」の対置語が「ふす—ふする」「すわる—すうる」の二例のみである理由を、「自的な他—全的な他」という意味の対立が反発することに求めているが、これだけで「ふす・すわる」が「みつから然する」であることが説明しきれているのであろうか。たとえば「ふす」と「すわる」がともに位置に関する格を要求するということは、ここに関与しないのだろうか。また感情主という格を認めるならば、これに相当する語句の「みつから然する」に配当される傾向がありそうなのだが、このようなとらえかたが適切であるのかどうか。著者の述べ方では解答があたえられない。

また、「みつから然する」がヲ格を要求しうる動詞であるとして、そのヲ格と「物を然する」の要求するそれの指示対象との間に、意味上の相違がないのであろうか。例えば、対象が変化するかいなか、という観点をここに割り当てたばあい、それがいかなる規準にもなりえないかどうか。一考の余地がありそうである。

自動・他動、あるいは他動性の問題を格の範疇とのかかわりで分

析するのは、今日、重要な研究領域を形成している。その意味でも、春庭の文法研究は、著者のあたえた方向からさらに探究される必要がある。

おわりに

以上、本書の概要をくみとりつつ、評者の能力の範囲のうちで責をはたすべく思考した軌跡を述べたが、誤読と理解の及ばぬところのあることを恐れる。著者の導いた結論は明確であるが、それをとりだすための作業の蓄積のいかほどであるかは、多少とも研究史の記述に携わった者には察せられるところであろう。とりわけ著者の対象としたような資料に即した研究においては、その地道な扱いが厳しく要求される。この意味において、本書は、春庭の語学研究に確実な基礎をつくりだしたのである。さらに、本書でその姿を現わしかけた柴田常昭の語学研究の全体像が、たしかな位置をしめることを待望する。

なお、いささかの誤植が発見されたので、以下に列挙しておく。

ページ	行	誤	正
三八	11	四段（往）	四段（住）
三九	15	是もうらみよといひて	是もうらみよといひて
四〇	7	又こその結びにも	又こその結びにも
四〇	8	神功巻	日本紀神功巻
四一	12	いふべし	いふへし
四五	3	野辺をにほハせてなど	野辺をにほハすなど
四五	10	また古今集に	また古今集秋に
四五	13	二タかたに活きて	かく二タかたに活きて
四七	5	こその結ひ詞也	こその結ひ詞也
四七	5	何の結びにて	何の結ひにて
五八	14	めく	〔めく〕
六九	10	末尾が「――くる（ぐる）」	末尾が「――るゝ」
一〇九	1	漢籍ノ訓	漢文ノ訓
一一五	18	「やたまた不用」	「やちまた不用」
一一六	9	問申	問言
一一六	17	大祓	大祓詞に
一一六	17	続紀	続日本紀に
一二四	6	第一の音より	其第一の音より
一三四	8	くはしくたへなるもの	くすしくたへなるもの
一三八	16	たふとぶる	たふとふる
一四〇	7	みつれとはたらく	みつれともはたらく
二〇〇	3	『活用言の冊子』のそれとを	『詞つかひ』のそれとを
二三六	1	自動の本姓	自動の本性
三〇〇	2	七組	八組
三七一	14	⑩	①
三七三	8	⑫	③
三九五	13	寸法まちく	寸法まち〳〵

四四八	17	（傍線一本）	（傍線二本）
	18	（傍線一本）	（傍線二本）
四四九	1	28「三の四七①」	28「三の四七①」
四七二	3	一四例	一五例
四九三	12	たちやあぬれまし（五八）	たちやぬれまし（五八）
四九五	11	● から　に訂正される	● から　に訂正される
四九八	15	改訂が行われる	改訂が行われる
五五九	16	㉑すへて	（この行、一字下げる）
五六五	8	成稿本詞八衢	成稿本詞通路
五七四	13	景治郎	景次郎

（和泉書院・一九九五年二月二五日発行・一五、四五〇円）

（のむら　まきお・上越教育大学助教授）